

シンチは、検査費用が96,260円(当院ルチーン検査)と高く患者の経済的負担が大きい検査だけに、その適応を十分考慮する必要があり、かつ、他科医師への啓蒙も、われわれ放射線科医の務めではないかと考えられた。

24. Beautiful bone scan pattern を呈した胃癌骨転移例

西岡 正俊 森田 荘二郎 沢田 章宏
山本 洋一 上地 修 小原 秀一
前田 知穂 (高知医大・放)
赤木 直樹 森田 賢 浜田 富三雄
(同・放部)

今回われわれは骨シンチ上、いわゆる Beautiful bone scan のパターンを呈し、生検にて、胃癌、前立腺癌の骨転移と診断された2例を経験したので、若干の文献的考察を加え報告した。胃癌骨転移例では典型的な absent kidney sign を呈したが、前立腺癌例では腎、膀胱が軽度描出され、診断に当たっては全体のバランスに注意する必要がある。

なお、本症例ではいずれも広範囲の強い骨 Ga 陽性集積を示した。

25. 骨シンチグラフィによる Sterno-costo-clavicular Hyperostosis の診断

大塚 信昭 福永 仁夫 曾根 照喜
永井 清久 村中 明 古川 高子
柳元 真一 友光 達志 森田 陸司
(川崎医大・核)
今井 茂樹 梶原 康正 西下 創一
(同・放)

胸骨、第一肋骨および鎖骨をとりかこむ領域に異常骨化をもたらす胸肋鎖骨間骨化症は1974年に国崎によって報告された原因不明の疾患である。今回われわれは本症と診断された4例について骨シンチグラフィ所見を中心に報告した。いずれの症例も胸鎖関節部を中心に強い集積を示す特徴的な像を示した。なお、4例中2例は掌蹠膿疱症と慢性扁桃腺炎を合併していたが扁桃腺摘出後も骨シンチグラフィに変化は認められなかった。また、他の1例は乳癌を合併しており、日常の骨シンチの読影の際、骨転移との鑑別にも本例を入れるべきと考えられた。

26. 多発性骨髄腫の骨病変の検出における骨シンチグラフィと骨髄シンチグラフィの比較

大塚 信昭 福永 仁夫 曾根 照喜
永井 清久 友光 達志 柳元 真一
村中 明 森田 陸司 (川崎医大・核)
井上 信正 杉原 尚 八幡 義人
(同・血液内)

多発性骨髄腫14例(未治療例6例、化学療法施行例8例)について、骨・骨髄シンチグラフィを施行し、多発性骨髄腫の骨病変の検出における有用性を検討した。多発性骨髄腫の未治療例6例の骨シンチグラフィの内訳は正常像3例および欠損像3例であった。これらの症例では骨髄シンチグラフィの方がより多くの病変部位を指摘でき、また浸潤範囲を明瞭に描出できた。

一方、化学療法施行例の8例は骨シンチグラム上、全例、集積増加を示した。一方、骨髄シンチグラフィでは骨シンチ上、集積増加を示した部位でも正常像を呈する例が多く認められた。多発性骨髄腫の骨線像は特徴的な所見を示すが、治療による骨病変の変化はとらえ難い。したがって、多発性骨髄腫の骨病変の評価には骨シンチグラフィに骨髄シンチグラフィを併用することの有用性が認められた。

27. ¹¹¹In-chloride 骨髄シンチグラフィの血液疾患における有用性の検討

——骨髄生検像との対比を中心として——

藤島 護 平木 祥夫 新屋 晴孝
佐藤 伸夫 山本 淑雄 清水 光春
黒田 昌宏 橋本 啓二 森本 節夫
青野 要 (岡山大・放)

erythropoietic marrow scanning agent として臨床的に導入された ¹¹¹In Cl による骨髄シンチグラフィの、血液疾患における有用性を検討したので報告する。対象は、昭和56年1月より昭和60年5月までに施行された症例のうち、内科的データのそろった49例で、造血骨髄部位9か所の uptake の程度を3段階に分け、スコアを与え、それと内科的血液学的所見とを比較することによって行った。また腸骨稜後部の uptake の程度と biopsy との比較を行った。